



# 広安里 第8号

発行 釜山日本人学校  
釜山広域市水営区民樂路 19 番道 11  
TEL 051-753-4166  
FAX 051-756-4851  
<http://user.chollian.net/~pusjpnsc>

## 夢をもとう

在釜山日本国総領事

松井 貞夫



総領事の松井です。広安里の近く、釜山の海と広安大橋が見える喫茶店で、この原稿を書いています。何を書こうか散々悩みました。本来であれば、総領事としてまっとうなことを書くべきでしょうが、悩んだ末、個人的な思いを綴ってみることにしました。

わたしは、関西地方のとある小さな盆地、四方を山に囲まれた農村に生まれ、育ちました。霧の深いところです。小学校、中学校、それから高校まで、地元の学校に通いました。

小学校時代は、素直で、まあまあ勉強のできる生徒だったのではないかと思います。ただ、中学生なかばぐらいから、壁にぶつかるようになり、成績も下がっていったように思います。川の土手で本を読んだり、知らない道を長時間歩いたりしていました。ただ、こういったこと、知らない町や道を歩くことは、わたしにとって、好奇心の一つの表れであったと見ることもできるかもしれません。それから、テレビで、日本や世界の色々な地方の文化や風習、自然などを紹介する「日本紀行」とか「世界紀行」、「世界の旅」といった番組を見るのが好きでした。

この寄稿文の題を「夢を持とう」としながら、わたし自身は、はっきりとした夢を持っていたわけではありません。しかし、今思い起こすと、漠然としながらも、外の世界に出てみたいという気持ちというか、好奇心、関心があったのではないかと思います。

結局、大学は地元を離れ、東京のとある大学に通うことになりました。大学時代は、残念ながら、専攻である法律の勉強にはあまりなじみませんでした。中国語と韓国語に出会い、おかげで、中国語と韓国語の勉強を最も熱心にしたように思います。中国語はものになりませんでした。一緒に学んだ友達や恩師とは、今でもお付き合いをさせていただいております。そして、韓国語を学んだことがきっかけとなって、外務省に入ることになりました。

外務省に入ってから、韓国の他、米国のシカゴと中国の北京で勤務をすることができました。外務省で自分が何をなし得たか、忸怩(じくじ)たる思いもありますが、わたしにとって「天職」ではないかと思えることも、何度かありました。今考えても、おそらく「天職」なんだろうと思います。ありがたいことです。

先ほど書いたとおり、わたし自身は、はっきりとした夢を持っていたわけではありませんが、中学生の頃からの関心、好奇心が、今のわたしに繋がってきたのだと思います。また、節目、節目で、わたしなりの「挑戦」もしてきたように思います。

余談ではありますが、学生生活や仕事以外では、50代の頃、「競歩」に挑戦したりもしました。最近、膝を痛めてしまいました。競歩への挑戦も、中学生の頃から歩くことが好きだったことの延長と言えるかもしれません。

とりとめのないことを書いてしまいました。結論としては、小学生、中学生の皆さんには、できれば、それぞれの夢を持ってほしいと思います。また、自分なりに、何かに関心、好奇心をもち、それを育ててほしいと思います。そして、挑戦してほしい。

わたしは、そろそろ退職する日が近づきつつありますが、今の仕事に専念しつつ、新たな夢を持とうと、模索しているところです。

# クラスの窓 小学部 5・6 年生

## 学級目標 *Never give up!!*

小学部 5・6 年生は、6 年生 6 名、5 年生 4 名の複式学級です。毎朝、元気のいい「おはようございます！」の声で一日をスタートしています。今年度は小学部のリーダーとして小学部をまとめられるように、行事のひとつひとつを大切にに取り組んでいます。

### <小学部 5・6 年生の目指す児童像>

- 広い視野を持ち、時と場合に応じて主体的に行動できる子ども
- 自他を尊重し、他者に対して思いやりのある行動がとれる子ども
- 失敗を恐れることなく、新しいことに挑戦する子ども

### 学級では、こんな取り組みをしています

#### めあてと振り返り

新しい月や一日の始まりに、めあてを設定しています。短期的な目標を持って行動し、事後にそれを振り返る姿勢を培おうとしています。

#### 今日のイトコ

毎日、一日の終わりに学級の友だちの良いところを振り返ります。何事も前向きに考えたり、取り組んだりすることを大切にしています。

#### 企画を立てよう

学期に一度、「学校生活をより良くする」をテーマに、ゼロから企画を立て、分担して取り組んでいます。失敗しても、それを次にどう生かすかに価値を置いています。

私は将来、何事にもあきらめずにがんばれる人になりたいです。なぜなら、すぐにあきらめたら、何も出来なくなるからです。そのために、今から何事にもあきらめずにがんばりたいです。

- ①サッカー選手・・・小さい頃からサッカーが好きだから。
- ②建築家・・・自分の建てた家に住みたいから。

私は看護師になりたいです。理由は、私がしたことに対して、笑顔を返してもらえる事が好きだからです。そして、体の調子が良くない人達のお世話をしたいから、看護師になりたいと思っています。

私の夢は、飛行機の整備士になることです。なぜなら、世界中を飛び回っている飛行機を整備したいからです。だから、この夢をかなえたいです。

ぼくは、お父さんと同じように、大人になったら仕事で外国に行くとき、英語をぺらぺら話せるようになりたいです。そのために、今から真剣に英語の勉強に取り組むようにがんばりたいです。

私の夢は、お医者さんになることです。なぜなら、人と接することが好きだし、人を助けて「ありがとう」と言われると、うれしいからです。だから、たくさん勉強をして、立派な医者になりたいです。

私の夢は、保育園の先生です。そのために、年下の子たちや、だれに対してもやさしくしたりしていきたいです。そしていつかは、この夢をかなえたいです。

私の夢は先生になることです。理由は、日本の学校や、この学校の先生はかっこいいからです。みんなに好かれるような先生になりたいです。

ぼくの夢は二つあります。一つは、電車の運転手になることです。この夢を達成できるように、算数や国語をがんばりたいです。もう一つの夢は、野球選手になることです。この夢がかなったら、ホームラン王になりたいです。

ぼくは、野球と恐竜が好きなので、野球選手になるか、古生物学者になりたいです。でも古生物学者になるには、英語を勉強しなければならないので、英語をがんばりたいです。



## 「雨ニモマケズ」

教諭 城内 千賀子

私には、物心ついた頃から、なぜか覚えていた詩があります。当時は、誰が作った詩なのか、詩の題名は何なのかは全く知りませんでしたが、なぜか頭の中から離れない詩がありました。やがて、小学校を卒業する時、その詩の作者がわかりました。なぜなら、卒業生全員でその詩を朗読することになったからです。作者は、「宮沢賢治」という人でした。そして、その詩は「雨ニモマケズ」という題名の詩でした。

きっと多くの人がこの詩を目にしたことがあると思います。しかし、初めの四行目ぐらいまでは意味がわかるものの、その先の意味がわからない人もいるのではないのでしょうか。実をいうと私もその一人でした。その先の意味をよく理解できたのは、大人になってからです。そこで、今回は、宮沢賢治没後80周年にちなみ、この詩をみなさんと一緒に鑑賞し、賢治の世界観を共有できたらと思っています。

さて、「雨ニモマケズ」の詩は、もともと詩という形で書いたのではなく、賢治が自分自身に言い聞かせるための、自戒のようなものとして書いたものだったと言われています。賢治はそれを死の前々年の秋に手帳に書きとめ、そのままかばんの一隅に詰めていたものを、弟の清六が賢治の遺品を整理している最中に発見したものです。だから、これは賢治の痛恨の思いを込めた言葉であり、もしもこれからも生き続けることができるならば、是非実行したいと思ったことが述べられている作品とも言えるのです。

「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」

賢治が最初にいうのは、自分の体へのこだわりです。賢治は少年期から青年期にかけて大きな病気にたびたびかかりました。そして、それが原因で看病していた父親までが病気にかかってしまいました。そこで、体が弱いということは、ただ単に自分の生き方を制約するだけでなく、他者までも巻き浴いにする可能性があるのだということを痛感した賢治は、「丈夫ナカラダ」をもつことは、この世に生きるうえでなによりも優先すべき大切なことだと考えているのです。

「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラツテキル」

丈夫な体を持った上で、次に大切なことは、穏やかに生きるということです。欲を持ってはいけないし、欲をもつことは他人を道具に使うことにつながります。だから、決して怒らず、いつも静かに笑っていられるような心の平静さを持つことが必要になってくるのだと考えているのです。

「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ アラユルコトヲ」

「ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」

さらに、粗食によく耐え、無欲でいることが大事なことだと続きます。一日四合とは、米が主食であり続けた日本の食文化において、長い間成人ひとりが一日に食べる米の量の標準だったと言われています。今日の感覚から言えばずいぶん多いように思えますが、それは私達が多くの副食を取っているからです。賢治の時代にあっては、多くの人々は米のほかにおかずを食べることがあまりありませんでした。つまり、腹を満たしてくれるのは、基本的には米であったのです。

「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ 東ニ病氣ノコドモアレバ」

「行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」

「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイハトイヒ」

「北ニケンクワヤソシヨウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」

そして、住む所は粗末な小屋でよいと考えています。そこでなら、仏の教えに耳を傾け、過不足なく暮らしていくことができ、東西南北四方に何か困っているひとがあれば、助けに行くことも出来ると考えています。人を助けに行くというのは、見返りを期待するものではありません。見返りを期待するとき、人の行為は純粋な性格を失ってしまいます。だから、見返りを期待した親切をしてはならないと考えているのです。

「ヒデリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ」

「ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ」

「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」

最後に、賢治が理想とするのは、みんなに「デクノボー」と呼ばれるような存在になることでした。「デクノボー」は決して自分の行った行為を感謝されることがありません。だから、自分はデクノボーとして、言い換えれば、空気のような存在として生き続けたいと賢治は願っていたのです。

いかかだったでしょうか。「雨ニモマケズ」に込められた賢治の思いは読み取れたでしょうか。私も丈夫な体を持ったことに感謝し、心の平静さを保ちながらこれからも穏やかに過ごしていきたいと思っています。